11　読書活動

(1)　朝読書

「特色ある教育活動」の取組として平成１６年度から始められた朝読書も８年目となり、全校一斉に読書から一日が始まることがすっかり定着している。

・時間　８：２５～８：３５（集会がある日を除く週３日）
・読む本　各自で用意させる。生徒は読みたい本を各自もってきているが、時期によって課題図書を読んだり、「総合的な学習の時間」の個人研究の参考図書を読んだり、各教室にある学級文庫の本を読んだりしている。
・「読書の小径」　朝読書の記録をつけるために用意している。この用紙に、読み始め、読み終わりの日付や一言感想、著者、出版社を記入。
・「読書の記録」　学期に読んだ本の中から一冊を選び、紹介文、印象に残った言葉、イラストなどを書かせる。全員の「読書の記録」を廊下に掲示する。
・学級文庫の充実　各教室に 40 冊ずつの学級文庫を設置し、いつでも本が読める状態にしている。学級文庫の管理整備に関しては図書指導員（本校在校生・卒業生保護者）の方の協力に負うところが多い。

(2)　課題図書

年間指導計画に基づいて年間６冊の課題図書を指定し、読書活動を推進している。課題図書は国語科が決めている。本は書店に学校に来てもらって販売しているためすぐ手に入り、朝読書の時間に読んでいる生徒が多い。

また、読みの確かめは定期考査や国語の授業で行っている。定期考査では、100 点満点中 10 点程度の配点で出題し、読んでいれば答えられる程度の問題を出題している。

継続して行っているため、兄弟から本を譲り受けて読む生徒も多い。学年で同じ本を読んでいるという経験が、国語の授業でも大いに役立つ。

今までの課題図書には、

１年　「夏の庭」「いしぶみ」「ボッコちゃん」「バッテリー」「こちら救命センター」
２年　「いちご同盟」「父の詫び状」「卵の緒」「少年H」
３年　「坊っちゃん」「楽隊のうさぎ」「旅をする木」「塩狩峠」

などがある。

(3)　ブックトーク

平成１８年度から地域の平和台図書館との連携を図りブックトークを実施している。ブックトークとは本の紹介のことである。対象は１年生で、各クラス１時間ずつ１～２日で行っている。いろいろな分野の本を紹介してくれるので、生徒の本の選択の幅が広がる。平和台図書館とは、夏休みに連絡を取り合い、日時、内容についての打ち合わせを行う。中学生にとって興味のもてる本を多数紹介してくれるので教員にも参考になる。

昨年度も 12 月に行ったが、「過ぎゆく時間の中で」というテーマで 12 冊の本が紹介され、それらの本を複数冊ずつ団体貸出してもらった。即日、本を借りた生徒も 10 人以上いた。生徒が新しい本と出会うチャンスになっているだけでなく、地域図書館とつながるよい機会になっている。

(4)　「中学生に薦める本―教職員・保護者―」

夏休み前に「中学生に薦める本」という小冊子を作成し、全校生徒に配布している。紹介者は教職員と保

護者である。家庭でも読書のことが話題になれば、本に対する興味関心が高まるはずである。推薦された本は図書室に推薦図書コーナーを設け、生徒が手に取りやすいようにしてある。

平成 22 年度版では、教職員 23 冊、保護者 17 冊、平成 23 年度版では、教職員 33 冊、保護者 21 冊の本を紹介している。

(5)　読書感想文コンクール

生徒の読書意欲を高めるという目的で、平成 17 年度から「校内感想文コンクール」を実施している。今年度で７年目になり、定着している。読む本は、夏休みの課題図書で、字数は 400 字詰め原稿用紙３～５枚とした。

各学年、夏休み前に読書感想文の書き方を国語の授業で指導する。各学年最優秀賞の計３編に国語科の講評をつけて冊子にし、全校生徒に配布する。また、同賞の 3 名は文化発表会で感想文を朗読している。

(6)　道徳授業地区公開講座

７月の道徳授業地区公開講座を読書活動と関連させて行って５年目になる。学年の指導案は各学年で検討して作成し公開授業を行い、その後、授業を参観した方々との懇談会を行っている。

平成 22 年度の授業で取り上げた本は以下のとおりである。

１学年	『夏の庭』湯本香樹実：ネット、ゲーム世代による安易に「死」を考える事件、犯罪が目立つ昨今だが、『夏の庭』は「死」の意味を学び、生きる力に変えた少年たちの明るく爽やかな物語である。命の尊さや人との交流の大切さを考えさせる作品である。
２学年	『父の詫び状』向田邦子：『父の詫び状』の「ごはん」は戦争中、命の危険を感じながら家族で食べた「最後の食事」の話で、親が子を思う心情が伝わってくる。家族から大切にされているという気持ちを改めて感じるきっかけになる作品である。
３学年	『夏の葬列』山川方夫：戦争の極限状況のなかでの出来事とはいえ、自分の身を守るために他人を犠牲にしてしまった主人公、一生罪悪感を背負って生きることになった主人公の心情を読み取ることにより、改めて命の大切さ、他人の命を尊重する心を育める作品である。

平成 23 年度の授業で取り上げた本は、１，３学年については昨年と同様である。２学年は『いしぶみ』を取り上げた。広島テレビ放送編：原爆による広島二中１年生全滅の記録である。父母が寄せた手記からは、原爆や戦争の悲惨さ、我が子を亡くした悲痛な叫びが読み取れる。平和の大切さ、命の尊さについて、生徒の思いを深めることのできる作品である。

どの作品もその学年らしい意見が多く出され、それぞれのテーマについて真剣に考えることができた。保護者の方からは、その作品の時代と現代の子供たちの置かれている環境の違い、子供たちの心の揺れなどについて話が出た。また、家庭での読書や親子で同じ本を読む試みなど、読書に関することも話し合うことができた。

（7）読書調査

読書活動について、図書委員会で年度末に読書調査を行っている。

平成 22 年度の朝読書に関しては、「本が好きなのでよい」「本が読めるのでよい」と答えた生徒は１年 89%、２年 93%、３年 92%であった。

また、「朝読書にまじめに取り組んでいるか」という質問に対しては、１年 67%、２年 80%、３年 77%がまじめに取り組んでいると答えている。

次に、４月から 11 月までに読んだ本の冊数は、0～3 冊と答えた生徒は１年 5%、２年 15%、３年 31%、

4～6 冊と答えた生徒は１年 29%、２年 35%、３年 31%、7～10 冊と答えた生徒は１年 29%、２年 25%、３年 17%、11～20 冊と答えた生徒は１年 15%、２年 13%、３年 15%、21～30 冊と答えた生徒は１年 11%、２年 8%、３年 3%、31 冊以上と答えた生徒は１年 11%、２年 4%、３年 3%（生徒数 450 人）であった。読んだ本のジャンルは、どの学年も圧倒的に小説が多かった。

平成 23 年度の調査も年度末に実施する予定である。

（8）国語科の授業での取り組み

・開進一中１年生推薦図書 50

平成 20 年度から１年生の国語の授業の中で「開進一中１年生推薦図書 50」を作成している。中学１年生が同学年の生徒に推薦したい本を選定し、紹介文を書き、小冊子にして読み、次の読書につなげるという目的で行っている。推薦された本は図書室で借りられるように購入している。また、前年度までの冊子を見て上級生の紹介する本を知ることが読書意欲につながっている。

・課題図書を取り上げた授業

道徳授業地区公開講座以外にも、国語の授業で読書単元を設定し、積極的に読書に取り組ませている。平成 22 年度２学年の授業では「卵の緒」を取り上げ、授業の最後に２年間の読書生活を振り返る中で、生徒から次のような感想が述べられていた。

> 僕は昔から本を読むタイプではなかったと思います。けれどこの開進第一中学校に来てから読書に対する見方が変わっていったと思います。毎日 10 分間の朝読書、年間６冊も出る課題図書、この読書への力の入れようこそが僕の読書を変えたと思います。わざわざ国語の授業時間に本の比べ読みなどをして、少しずつだけれども読書はいいことだと感じ、力もついてきたと思います。（男子）

平成 23 年度、１年生では「夏の庭」を授業で取り上げ読み込ませ、２年生では「いしぶみ」の朗読発表会を行った。３年生では「塩狩峠」について１０月に取り上げる予定である。

（9）　「読書活動」の成果と課題

・朝読書

朝読書は生徒にとって今や当たり前の習慣になっている。毎年新入生も入学式翌日から朝読書を行っている。本を携帯するのを忘れた生徒も朝読書にスムーズに入れるのは、やはり学級文庫を充実させていることが大きい。10 分間の朝読書が自然なことになっているので、５分程度のちょっとした自由時間にも本を開く生徒が多い。さらに、朝読書を充実させていくためには、担任も一緒に読書をしたり、本を話題にしたりすることが必要である。

また、読書アンケートによれば「読書の時間を延長してほしい」と希望する生徒も多数おり、読書そのものへの興味関心が育っていることがわかる。

・課題図書

国語科で課題図書の選定をしているが、生徒が本を好きになる本、新たな発見をもてる本、ぜひ今の時期に読ませたい本など、本の選定を研究し、読書の楽しみや読書の習慣の糸口にできるように心がけたい。また、テストで確かめるだけでなく、課題図書を読んだことを活用する授業を工夫していきたい。さらに、進路指導や総合的な学習の時間でも読書を進めていく工夫をしていきたい。

長年の課題図書の積み重ねによって、保護者の理解も得られている。

・読書のすすめ

教職員・保護者・生徒による「お薦めの本」を紹介する小冊子は、生徒の本への関心を高めることにつながっている。図書指導員が図書室の本の整理や管理を行い、放課後の図書室の開室をしていること、地域図

書館との連携ができていることなども生徒が本に親しみやすい環境を作るために大きな役割を果たしている。また、図書委員会が読書の環境づくりに関わり、読書の啓発活動をできるようにしていく活動の充実などは今後の課題である。

・国語科の指導

課題図書が定着し、地域図書館との連携も十分にとれているため、今年度も、選択授業で団体貸出を利用して一人ずつ別の資料で内容を深めたり、課題図書の小説全体の読み取りをしたり、童話の読書会をしたり、本一冊を学習に活用した国語科の授業ができた。

このように、読書単元の授業と言えばすぐ連想される本の紹介スピーチや読書記録の授業にとどまらず、様々な形の授業が考えられ、「読む力」だけでなく、「書く力」、交流を通しての「話す力・聞く力」など、身に付けられる力も幅広い。

これからさらに充実した授業ができるよう、研鑽を重ねていきたい。